

子供から高齢者まで雪でつなく地域活性化

佐藤 五郎

1. はじめに

1.1 山形県長井市の地理的環境（図1、写真1）

長井市は山形県南部に位置し県民の母なる川「最上川」に沿って市街地が広がっている。また最上川上流域最大の支流・置賜白川も長井で最上川に合流する。さらに花崗岩体地域を流れ縦横に走る市街地水路を潤している県下有数の清流・置賜野川も流れている。かつて最上川舟



写真1.野川扇状地の扇頂部から冬の市街地と散居集落を望む



運の時代は上杉米沢藩の船着場として栄えた。

これらのことから水のまちとして「水と緑と花の長井」を標語に掲げている。とくに水道水源は地下40mからポンプアップした野川の伏流水を使用しており、水質の良さと硬度20前後の軟水は様々な分野に貢献し市民生活を潤している。その一方で朝日連峰の南麓にあたるため冬季は1~2mの豪雪に見舞われ、とくに20mを越える強風からなる偏西風は周辺市町村と比較しても突出している。

このため市街地西側に広がる田園地帯では数十本の屋敷林で住宅を囲んだ見事な散居集落を形成している。

さらに近年では人口減少の流れを止めることができず、今年の8月31日現在で27366人まで縮小した。当然、野川扇状地の扇端部に形成された中心市街地の商店街は衰退の一途を辿っている。さらに冬季の豪雪は大きな除雪費用を強いられ、多くの市民は各家に籠りがちになる。

1.2 活動のねらい

このような状況の中で長井ダム建設時の広報施設だった「野川まなび館」は、ダム完成（平成23年）とともに役割を終えたが、残った施設の管理活用を当NPO法人最上川リバーツーリズムネットワークが市より委託を受けて運営している。扇頂部に位置する野川まなび館周辺は、市街地の2~3倍の積雪量に見舞われ、冬季間の来館者は極めて少ない状況である。

そんな中でできるだけ費用をかけずに豊富な雪を楽しむ、なおかつ地域の活性化に繋がるような方策を試行錯誤しながら事業展開を進めてきたものである。次に、主なる活動を紹介する。

2. 冬季の各事業とねらい

2.1 野川水源地域フォトコンテスト（図2、写真2）

平成26年より地域の良さを発掘し見直すことで地域活性化を図ることを目的にフォトコンテストを開始した。撮影場所が長井であること、水に関係する映像であるこ

第3回 野川水源地域フォトコンテスト



第2回野川水源地域フォトコンテスト 最優秀賞 作品 長井市 松永 政和 氏「真夏日 涼しげな滝」

最優秀賞は つや姫 1 俵(60キ口)進呈!

地域特産品が当たるフォトコンテストを開催中!

「水と緑と花のながい」と呼ばれる長井市は、清流置賜野川をはじめ、まちなか水路や平山の大幹切堤防など水に関係する場所がたくさんあります。

このフォトコンテストでは、長井市で撮影された水に関係している写真を募集します。最優秀賞にはつや姫1俵進呈! あなたのとおきのお写真を是非ご応募ください。

■募集期間：平成28年1月～11月30日

■応募条件：(1)撮影場所が山形県長井市内であること (2)水に関係している写真であること

■賞品：最優秀作品1点、優秀作品3点、佳作作品8点 各入賞者に表彰状のほか副賞 山形特産米つや姫、応募作品オリジナルカレンダー、その他地域特産品を贈呈

詳しい応募要項は裏面をご覧ください。

図2. 第3回フォトコンテストのチラシ

との2条件で募集した。年々応募数が増え昨年は67作品が寄せられ山形県写真連盟会長を審査委員長に長井ダム管理支所長、野川土地改良区理事長、山形新聞長井支社長、長井市地域づくり推進課長の5名で審査を行ない最優秀1点、優秀3点、佳作8点の計12点の入賞作品を決める。入賞者には野川土地改良区より山形特産米つや姫が贈られる。ちなみに最優秀者には、つや姫1俵(60キ口)が与えられる。また入賞者全員に特産米つや姫のほか地元産野菜の漬物や自分の作品で作成したオリジナル



写真2. 最優秀賞の特産米1俵(60キ口)の贈呈

カレンダー、長井ダム湖のボートツーリング優待券などが贈られる。毎年11月末に応募を締め切り12月に審査、1月に表彰式、その後3月末まで全作品の展示を行ない入賞者に関する家族など多くの方々が作品を見に来館する。加えて入賞作品12点は長井市報1月から12月まで各月1日号の裏表紙(A4 1頁)を飾ることになる。

この結果、地元のカメラ愛好家をはじめ県内外からの応募者も増え、市民との交流が図られるとともに地域を見直す良い機会になっている。このコンテストの特異点は副賞としての賞金は出さないが、関係団体が地元産物を無償で提供し、さらに行政が市報媒体で作品紹介を1年間続けることにある。この結果、主催者のNPO法人は応募チラシの作製費用と事務負担ぐらいで済むことができ、その一方で市民から高い評価を得て活性化に繋がっている。

2.2 クリスマスリース作り(写真3)

12月に入るとまずはクリスマスリース作りである。これも参加費は500円で極力費用を抑えている。近くで採取しておいたツルやドングリ、マツカサ、ナナカマドの



写真3. クリスマスリース作りを楽しむ親子



写真4. キャンドル作りを楽しむ親子

実などを利用して自然豊かなリースを作成してもらおう。親子での参加はもちろん祖父母と孫の参加などで極めて人気があり完成品を持ち帰って自宅に飾り、12月の寒さを吹き飛ばす暖かい家庭団欒の一助となっている。

2.3 雪灯り回廊まつりと野川雪まつり（写真4～8）

2月初旬には長井市の市街地を中心に雪灯り回廊まつりが行なわれる。これは費用をかける祭りではなく、市



写真 5. 野川まなび館を照らす雪灯り



写真 6. 雪集めに無償協力の地元建設業者



写真 7. 高さ7mの雪像



写真 8. スノーモービルを使っのイベント

民がポリバケツに詰めた雪を逆さに取り出し、そこに立てたローソクに火を灯して各住宅の前を飾って冬を楽しむ行事であり今年で14回目になる。これに合わせて当法人でも野川まなび館を会場に、親子のキャンドル作りを開催している。参加費は無料ながら材料を提供してスタッフの指導のもと作成する。できた作品はクリスマスリース作りと同様に各自持ち帰って雪灯り回廊まつりに使い家庭団欒を楽しんでもらう。同時に野川まなび館周辺では1週間にわたって雪まつりを開催する。地元建設業者が無償で重機を使い巨大雪像をつくるための雪を集めてくれる。さらにスノーモービル愛好者の若者達がこれまた無償でモービルを使っの雪を楽しむイベント（参加料；無料）を開催してくれる。また期間中に、市内小学校のスキー大会等も行われ大勢の来場者で賑わう。このように大きな費用をかけることなく子供から高齢者まで雪を通したイベントを楽しんでいる。

2.4 雪上ウォーキング（写真9）

1.5メートルほどの積雪になる野川まなび館周辺では



写真 9. 野川沿いを歩く雪上ウォーキング

毎年2月下旬に雪上ウォーキングを実施している。山岳ガイドの資格をもつ専門家を案内人をお願いし清流・野川周辺をカンジキやスノートレを履いて歩く。静まり返った中で雪面に刻まれた動物の足跡や河岸林の種類を確認したり、川の音を聞きながら雪上の歩き方や注意点、さらに地元の歴史等を学んでいる。コースは高齢者でも歩くことができるように配慮している。ウォーキングの後は地元食材を使用した清流弁当を頂くのが恒例になっている。参加費は1500円に抑え、その中から1000円の弁当と保険、ガイド謝礼などを出している。まずは冬の自然を楽しむことに主眼を置いている。

この結果、地元だけでなく県内外からの参加者があり、またリピーターも多い。

2.5 冬山トレッキング(写真10)

野川扇頂部付近の山を対象に毎年3月になると雪山トレッキングを開催する。これは当法人が事務局を担当している長井ダム水源地域ビジョン推進会議が主催になり、構成団体である岳人長井がガイドする。目的は里山に登り冬の景観を楽しみながら体力の養成を図り、地元の景観を鳥瞰的に捉えてもらうことにある。



写真10. 里山に登る冬山トレッキング



写真11. 水の案内人養成講座(流量測定の実習)



写真12. 水の案内人養成講座(積雪密度の測定)

2.6 水の案内人養成講座(写真11,12)

水に特化して地球規模の循環をはじめ、河川、湖沼、地下水など東北地方の陸水の具体例を交えながら水質、治水、防災、救急、地域づくり、生命活動との関係など多岐にわたり座学、実習などの講座を開催する。1コマ90分で全16コマ(1440分)にわたり1月~3月の8日間にわたって行う。講師は其々の内容にしたがって専門家をお願いしている。その一例として、野川まなび館周辺の積雪を教材に、積雪密度を測定し自宅の屋根にかかる雪の重みなどを推計している。参加料は無料で全講座を受講した方には当法人代表理事名と長井市長名で水の案内人を証明する修了証書とIDカードを発行する。今年の冬で6年目になるが、これまで20代から80代まで40人ほどの修了生を出し、各方面で活動している。

まとめ

このように12月から翌年3月までの約4ヶ月間にわたり雪を活用して、ほぼ切れ目なくコンテストから養成講座、各種イベントなどを行なうことによって豪雪地帯における地方小都市ならではの過ごし方を提供している。大きな費用を要しなくても其々の持ち味を生かして協力し合い、全体として多種多様で長期間にわたって雪に親しむ機会が設けられる。とくに子供と高齢者が同じ空間で一緒に楽しめるような機会づくりを大切にしている。

雪は一見マイナスイメージを伴うが、本来は重要な水資源であり、豪雪地帯ならではの楽しみ方や学び方がある。年間の三分之一を積雪で覆われる当地方にとっては時間的に長短組み合わせた事業を展開することにより四季の移ろいに合わせた生活の豊かさを生み出している。このことが、やがて水のまちとしての地域活性化に繋がるものと確信している。